「信仰・希望・愛」の展開の物語り

第五部　パウロの福音伝道の内容の抜粋(その３)

「御霊のキリスト」

パウロにとってキリストは、イエスと云う人物として自分の外におられるだけの方ではありません。パウロにとってキリストは現実に御霊と云う形で、自分に対して、又自分の中で働かれる方です。キリストは復活の後、パウロにも現れて、パウロをご自分の僕として召されました。キリストが現れたという事は、キリストがその人に対して働きかけられたという事です。その働きは１回限りのものではなく、パウロの生涯にわたります。パウロはこのキリストの働きを受けて、キリストの僕として生涯、福音の為に働き続けました。パウロはその働きを自分の働きとしてではなく、自分の中におられるキリストの働きとして自覚しています。パウロは自分の働きを回顧して次のように言っています。

「異邦人を従順に導くために、キリストが私を通して働かれたこと以外は、わたしはあえて語ろうとは思いません。キリストが言葉とわざにおいて、しるしと不思議を現す力により、御霊の力によって働かれたのです」（ローマ１５；１８～１９）。

このようにパウロは自分の中にいまし、自分を通して働かれるキリストを深く自覚していました。パウロはそのキリストの働きを「御霊の力によって」なされた働きとしています。キリストの働きは御霊の働きです。パウロはこのことを「主は御霊である」と明言し(Ⅱコリント３：１７)、キリストを「霊なる主、御霊の主」と呼んでいます(Ⅱコリント３：１８)。

パウロはこの御霊として働かれるキリストを告げ知らせます。福音を信じ、キリストを受け入れる時、御霊のキリストが私たちの内に来て、わたしたちの中で働き始めて下さいます。パウロが宣べ伝えるキリストは「主(キュリオス)」と呼ばれますが、わたしたちを外から支配する者として、私たちに命令される方ではありません。私たちの中に新しい事態を創りだして下さる方です。わたしが「新しい人となる」、それが救いの現実です。

「あなた方は、神の御霊があなた方の内に宿っているかぎり、肉の次元にいるのではなく、御霊の次元にいるのです。キリストの御霊を持たない者はキリストに属する者ではありません。キリストがあなた方の内にいますならば、体は罪のゆえに死んでいても、御霊の義の働きによって(わたしの)命であるのです」（ローマ８；９～１０）。

キリスト者とはキリストに属する者のことですが、ここでパウロは重大な発言をしています。洗礼を受け、教会に所属し、主日には礼拝に出席し、献金を献げていてもそれだけでは、つまり、もしその人がキリストの御霊を持たないならば、キリストに属する者ではない。すなわちキリスト者ではないと云っています。「御霊が自分の内におられる」と自覚しなけ

れば」、と云っているのでありません。キリスト者はキリストの御霊によって生きている者だと自分で認めているかどうかという事です。キリストの御霊が内に働いておられる時、その人の内に「キリストがいます」と云われます。人間の内に働く霊が、「神の御霊」（キリストの御霊）として同格に語られ、その御霊が人間の内にあって働く時、それはキリストご自身が内にあって働いておられるのだと云われます。御霊のキリストをこのように自分の内に迎え、その働きを受ける者が、「キリストに属する者、キリスト者」となるのです。御霊が自分の内に来ておられると自覚できないかもしれませんが、自覚の問題ではなく、「キリスト信仰」（前に述べました）、即ち「キリストにあって」と云う場に立つことが出来るなら、御霊は働いて下さるのです。この「主にあって」という事は結局主キリストとの交わりのことです。交わりですから当然応答＝受け答えがあります。祈りと云うのはお願いだけではありません。答えを待ち、ある時は喜び、ある時は失望するでしょう。でも準備として相手を知る必要があります。それが聖書を読むという事であり、礼拝の中で父なる神さま、神の子イエスに出会う事なのです。婚約者を本当に知ることは大切だと皆様も思うでしょう。イエス様は婚約者よりずっと大事な方です。そうと考えない方はキリストを信じているとは言えません。もう一つ大切なのは、主キリストに会いたいと思うようになることです。幸いに私どもは復活すると約束されています。キリストの中に死んで行って復活するのです。終末を待っているのです。「マラナ・タ」「主よ、来て下さい」。

「聖霊の賜物」

霊的の賜物については第Ｉコリントの１２章から１４章まで詳しく書かれています。芦屋聖マルコ教会の２０１３年の聖句は**「あなた方はキリストの体であり、また一人一人はその部分です」**と云う１２章２７節の、み言葉です。１３章の「愛」（有名な愛の讃歌）も、１４章の「異言と予言」もすべて聖霊の賜物であると記されています。コリント集会の主の晩餐と祈りを共にする最初期の集まりは、御霊の多様な働きと現れに満たされ、霊の熱気に高揚していた様子が窺われるのですが、一方この御霊の働きと云う未知の現象と熱気に大きな喜びと共に戸惑いもあり、一部霊的熱狂の行き過ぎもあったようです。それで、彼らが受けている霊の賜物によって「エクレーシア」（霊の教会）を建ち上げるという重要な目的の為に、パウロは細心の注意を払って勧告しています。（どうぞＩコリント１２～１４章を詳細にお読み下さい）。「エクレーシア」（やがて組織的教会となって行くのですが、パウロの時代には、集会、共同体、せいぜい家の教会と云った将来の教会の母体でした）の成立と私たち信徒個々の関わりと云う、福音の基本的内容が示されており、「パウロによるキリストの福音」の理解に、極めて重要な文章、「信徒の一人一人にキリストの香りが与えられている事」をⅡコイント、２；１４～１６に記載されております。

聖霊の働きについてまず指摘されることは、**「聖霊によらなければ、だれも≪イエスは主である」とは言えない**（Ｉコリント１２～３）のです。この告白から色々な聖霊の働き、務め、つまり賜物（カリスマ）が与えられるのですが、与える方はご聖霊であり、イエスであり、三

位一体の神様であることが宣べられています（Ｉコリント４～１１）。

「様々な賜物」

「賜物にはいろいろありますが、それをお与えになるのは同じ聖霊です。務めにはいろいろありますが、それをお与えになるのは同じ主です。働きにはいろいろありまが、すべての場合にすべてのことをなさるのは同じ神です。一人一人に御霊の働きが現れるのは全体の益となるためです。ある人は御霊によって知恵の言葉、ある人は同じ御霊によって知識が与えられ、ある人にはその同じ御霊によって信仰、ある人にはこの唯一の御霊によって病気をいやす力、ある人には奇跡を行う力、ある人には預言する力、ある人には霊を見分ける力、ある人には様々な異言を語る力、ある人には異言を解釈する力を与えられています。これらすべてのことは、同じ唯一の御霊の働きであって、御霊は望むままに、それを一人一人に分け与えて下さるのです。

（Ｉコリント１２：４～１１）

コリントの最初期の集会では様々な御霊の働きが、日常的に会衆みんなの前で示されていましたので、当時の信徒たちには賜物が身近な経験でしたが、現在の教会には理解しがたい現象も多いので、以下その説明を述べます。最初に「知恵(ソフィア)の言葉」と「知識(グノーシス)の言葉」です。この二つを厳密に区別するのは困難です。パウロは「奥義」としての神の言葉を語っていますが、「神の知恵」は、世の霊ではなく、神からの霊によって与えられ、その御霊によって「神からの恵みとして与えられているもの」を理解するのです。ここに語られている「知恵」は、「隠されている神の奥義《ミュステーリオン》」と「神から賜っている《恩恵》の事態」の両方を理解する能力です。前者はイスラエルの歴史の中に隠されていた「神の秘密の《救済計画》の理解であり、具体的には旧約聖書を解釈するという形で現れる知恵です。後者＝知識は、神がイエス・キリストの地上の働きと言葉によって最終的に与えて下さった恩恵の救済の事態を的確に理解する力です。そして、このように御霊によって与えられた「知恵」の内容を語るには、「人の知恵によって」教えられた言葉によるのではなく、「御霊に教えられた言葉によって」語らなければなりません。この言葉が「知恵の言葉」(知識の言葉)であり、《エクレーシア》の信仰内容を指導する重要な賜物です。パウロは、非常にすぐれた聖書知識だけではなく、第三の天まで引き揚げられるという霊的啓示体験も含めて、このような「知恵の言葉」に満たされた、典型的な人物でした。

次に、「信仰」と「病気をいやす力」と「奇跡を行う力」の三つは、ほぼ同じ内容を示すカリスマ(賜物)です。ここでいう信仰は、「イエスを復活者キリストと信じ、主と告白するという意味の信仰」、即ち「信仰によって義とされると云う時の信仰」とは違い、「山を移す信仰」（Ｉコリント１３；２、マルコ１１；２３)と云う、力ある業を行う特別の霊的能力を指し示す信仰です。それは「奇跡を行う力」とも云われます。その奇跡は大部分(病気をいやす力)として現れます。パウロもこの力に豊かに恵まれていました。(ローマ１５；１９)。

次のグループ、「預言」と「異言」は御霊によって直接語り出される言葉であって、集会の参加者が理解できる日常語で語られるのが預言であり、語る本人すら全く理解できない言葉で語られるのが「異言」です。更にその本人も分からないは言葉＝異言を説き明かすカリスマ(賜物)を持つ人もいると云われています。以上、色々な霊的能力がカリスマ(賜物)と呼ばれますが、それを受ける人の能力や資格とは無関係に恩恵(カリス)によって、与えられている能力であるから(カリスマ)と呼ばれるのです。大切なことは、与えられている一つ一つの能力が、自分の身についた能力だと勘違いしてはなりません。「カリスマ」として受ける能力は様々でも「同じ御霊から与えられるのです」。

「務めは様々ですが、同じ主です」(５節直訳)。ここに挙げられている色々な霊的能力は、その人の益の為ではなく、人に仕える能力として与えられています。仕え方は様々ですが、仕える主人は同じ方、即ち、主キリストに外なりません。

働きは様々ですが、すべてのことにおいてすべてをなされる神は同じです(６節直訳　市川師訳)。ここに記載された様々な御霊の働きをしておられるのは同じ神です。ここで神が**「すべてのことにおいてすべてをなさる方」**と表現されています。神は「天地万物の創造者にして保持者」であるだけでなく、目の前の「エクレーシア」で働いておられるのです。こうして「エクレーシア」は、神、主キリスト、御霊が一体として具体的にその働きを現される場となっているのです。「三位一体」は議論の問題ではなく、《エクレーシア》での具体的な体験なのです。

(一人一人に御霊の現れが与えられている)のは益となるためです(７節直訳)。誰の為の益かは、この１２～１４章全体から、「エクレーシア」形成の為の益であることは明らかです。主はみ心の欲するままに、「エクレーシア」を構成する一人一人に御霊の現れを与えて「エクレーシア」の形成に奉仕させられます。御霊は目には見えません。どこから来てどこへ行くのか誰も知りません。しかし、御霊の働かれる時には、「御霊の現れ」があります。

「わたしたちはみな、ユダヤ人であろうとギリシャ人であろうと、奴隷であろうと自由人であろうと、一つの御霊によって一つの体の中へバプテスマされ(浸し入れられ)、皆一つの御霊を飲んだのです」　(Ｉコリント１２；１３　　市川喜一師　私訳)

本来「バプテイゾー」と云う動詞は、(水の中に漬すとか沈める)と云った動詞です。勿論「洗礼を受ける」という意味を持っていますが、「一つの体の中へ」と云う言葉に添えられると、「沈む、とか、浸す」といった意味が明らかになって来ます。だから《洗礼を受ける》と云う意味と二つの意味が微妙に組み合わさったものと受け取る方がよいのではないか。ローマ書６章３節に**「それともあなた方は知らないのですか。キリスト・イエスの中へとバプテスマされたものは誰でも、キリストの死の中へとバプテスマされたのです」**と云う言葉をパウロが使っています。コリント書簡のこの箇所でも二つの意味が重なっていますが、「御霊によって」と云う句が加わることによって、「洗礼を受ける」という儀式的な意味は

背後に退き、キリストの体と云う霊的現実に組み入れられると云う、霊的出来事が前面に出てきます。この一つの体に所属するという事実が、賜物がいかに多様であっても「エクレーシア」の統一を保証するのです。この保証が、「一つの体に多くの賜物が混在していても、混乱は起こらず、十字架されたキリストを信じる者に聖霊が与えられ、賜物によって仕えるようにされることの重要さを指摘しています」。つまり、洗礼を授けられる意味の重要さです。だから、キリストを信じて洗礼を受けるということは、キリストの福音を授かることです。

「エクレーシア」を「キリストの体」と理解するのは、パウロ独自のものであり、様々な「エクレーシア」理解の中で最も深いものの中の一つです。その理解が、聖霊を語るブロックの中に出てくるのは偶然ではありません。聖霊の働きを語る時、必然的に聖霊の働きの具体相である《キリストの体》「エクレーシア」に触れないではおれないのです。パウロはコリントの集会が聖霊の賜物《カリスマ》に恵まれているために，各自が自分の霊的能力を誇り集会の交わりが損なわれることを心配して、同じ一つの体に属することを強調しました。教会の本質を深く喝破したパウロのこの一文を、現在の複雑な教会問題を考える時、キリストの体としてのキリスト共同体の形成は、聖霊によると云う、パウロのこの原点に立ち帰って、そこから考えねばなりません。一人一人が、キリストの御霊に導かれて、あらゆる人間的拘束から解放された「自由」、と(平和な精神)とを持って、パウロの言う、**「尊いのは、愛によって働く信仰だけである」**(ガラテヤ５；６　口語訳)を、キリスト者の信条として、かのアルベルト・シュバイツアーのように一歩踏み出して生きたいものです。

「信仰・希望・愛」の展開の物語り

第五部　パウロの福音伝道の内容の抜粋(その４)

「御霊によって生きる」

「すべて神の御霊に導かれている者はすなわち神の子である。あなた方は再び恐れを抱かせる奴隷の霊を受けたのではなく、子たる身分を授ける霊を受けたのである。その霊によってわたしたちは《アバ、父よ》と呼ぶのである」(ローマ書　８；１４～１５)

私たち一人一人が自分の人生を一つの物語としながら生きています。私も紆余曲折を経ながら、ふり返ってみると可なり面白く楽しく(苦しかったことも悲しかったことも、振り返ると、後悔だらけですがよく生きて来られたと聖霊の導きに感謝して、興味深く感じられるようになり)生きてきた喜びを感じます。そしてそれは２８歳に洗礼を受けて、次第に成

熟させられて自分も「神の子のひとりだ」と云う感じ方を不思議だと思わなくなった頃から人生が苦しくても、面白く楽しくなってきた。神の子と感じるようになって(勿論言うも恥ずかしい、神の子の劣等生ですが)、いや、そのような言い方は間違いで、神の子と云う状態は神様・イエス様に全く自分を任せたのですから、神様に評価も任せて、自分はそれを気にしない。神にすべてを任せていますから、人の言うことが気にならない。自由が来ました。そこでその「キリスト者の自由」に移ります。

「自由という喜び」

「兄弟たち、あなた方は自由を得るために召し出されたのです。ただ、この自由を肉への機会とせずに、愛によって互いに奴隷となりなさい(ガラテヤ５：１３　市川師私訳)。

私は昭和２９年に広島から尼崎に来ました。生きて行く上でも信仰的にも失意の時でしたが、マルコ教会(その時は芦屋基督教会と云う名前でした)で小池俊男師父に出会って回心(と自分では思っていますが)した時、「貴いのは、愛によって働く信仰だけである」(口語訳)を愛唱聖句として挙げたのですが、市川師のこの「奴隷となる」と云う言葉に打たれました。これこそ《アガペー》(神の愛)を顕す根底的な言葉であると思いました。

パウロが自由と云う時、何よりもまず律法からの自由でした。律法とは私たちの行為と生活を外から規制する規則です。現在風に言うと、大は社会の秩序を守る法律や規則、倫理道徳と云った所でしょう。小は社会のもろもろの秩序を守る規制や規則と云ったものでしょう。でも、いかに大切な規則でも、その遵守だけが救いの条件であると外から規制するものなら、それは人間を拘束する「奴隷のくびき」なのです。神はキリストの十字架の贖いとキリストの復活によって、私たちが信仰によって聖霊を受ける道を開き、その聖霊のいのちによって、倫理・道徳・法律。諸規則以上の、神の善に導き入れられたのです。だからそれらの人間的な規則によって生きる事を縛られるのではなく、キリストは私たちを自由にして下さいました。しかし、この自由は内なる聖霊から発する「わたしの現実・主の真実」すなわち「神の善」が私を支配していることを心から信じていないと、自分の肉が欲するままに放縦に走ったり、何を基準にして生きればよいか不安になったりすることがあるでしょう。パウロが「自由に生きる」とはどういう事かを、具体的に教えたのが先のガラテヤの聖句ですが、その前に置かれた次の聖句

「この自由を得させるために、キリストはわたしたちを自由の身にして下さったのです。しっかりしなさい。奴隷の軛に二度とつながれてはなりません」

(ガラテヤ５；１)　を忘れないで。

まず、キリストにあって自由を得ていることを確認した後、直ちにその自由が愛によって生きる為であることが示されます。愛は自由の場の外では成立し得ないからです。自由であ

るという事から、自分がしたいことは何をしてもよいのだという誤解をする事を厳重に戒めねばなりません。キリスト者の自由は自由放従ではないと云っています。だからパウロは「この自由を肉への機会としないで」と念を押しました。肉とは何でしょうか？パウロは「身体(ソーマ―)が霊魂を含む、生まれながらの人間全体の在り方を肉と呼び」、霊は生まれながらの人間に属するものではなく、神に属するもの、神から来るものだとします。だから神から来る霊がわたしたち人間の内に宿る時、私たち人間存在にも霊の次元が生まれるのです。その霊の次元が生まれながらの人間本性である「肉」と対立するという事になります。「霊」が神に属するものであることを表明する為に、「神の霊」とか「聖霊」と云う言葉で表されます。霊はこのように、神に属することが当然ですから、単に「霊」と云う言葉だけを用いることもあります」。また御霊の実を顕している重要な聖句の最初に、書かれている言葉は「愛」です。(ガラテヤ５；２２～２３)。この聖句が私を成熟させてきました。どうぞ各自で熟読玩味してくださいますように願います。という事で、第６部「永遠のいのち」の次の、第７部で「愛」を考えるようになります。

「キリスト讃歌」　（フィリピ２；６～１１」

「キリストは神の身分でありながら、神と等しい者であることに固執しようと思わず、かえって自分を無にして僕の身分になり、人間と同じ者になられました、《以下はご自分でお読みください》」

聖霊の働きを受けて、キリストの恩恵の有難さを知り、新しい自分を体験した者は、新しい自分の根源となられたキリストを賛美し、云い表し、人に告げ知らせないではおれません。その事を実感する為には、キリストの霊と、違う別の偶像の霊とを見分けることが出来ねばならなくなります(Ｉコリント１２；１～３)。そしてキリストの聖霊によらなければだれも**「イエスは主である」**と云えないと、説くようになります。**「イエスは主です」と本当の意味で**言えるかどうかが大切な問題なのです。

パウロはＩコリント２；３で、**「わたしはあなた方の間で、イエス・キリスト、それも十字架につけられたキリスト以外、何も知るまいと心に決めていた」**と書いています。「十字架につけられたキリスト」とは二千年前に、ローマの兵士によって十字架につけられたキリストの姿だけを伝えているのではありません。「キリストが十字架につけられた姿のまま**今も示されている**」という事を言っています。パウロがキリストと云う時、地上の歴史的人物と云うだけでなく、復活して現在生きておられる霊なるキリスト・メシアを指しており、すでにその主キリストが、私たちを救いに導かれた真実が含まれているのです。
しかし、(十字架につけられて殺されているという相を持った復活者キリスト)と云う現実は、人の知恵の言葉や論理で説得できるものではありません。それは「御霊と力の迫り」に

よって、聞く者の魂に直接示されねばならぬものです。パウロも「十字架につけられたキリスト」を宣べ伝えたのです。その結果その福音を信じたガラテヤの人々に、聖霊が注がれて彼らも「十字架上に殺されて復活したキリスト」と云う二重の相を「はっきりと示された」のです。

こういうわけで「イエス・キリストは主である」と公けに宣べ、父なる神を讃えるのです、とキリスト讃歌の最後に賛美を献げられます。もう一つパウロの言葉をここで引用します。**「肉の思いは死であり、霊の思いは命と平和であります」（ローマ８：６）**と私たちキリスト者が与えられた命と平和に感謝し、キリストを賛美しています。肉の思いとは何でしょう？人間が生まれつき持っていて、それから逃れられない煩悩・欲望。不安・闘争心の数々でしょう。それの為に人間は善なる人間性を失って、神が創られた本当の人間ではなくなってしまうこと、それが死です。聖霊に支配され生きている人は、イキイキとした人間性で、単純にイエスが言われる善の方向に進んで行く。それが本当のいのち(ゾーエ)であり、物事をくよくよと思い煩わない。自分も平安であり、他人にも平和である。平和の根本義のようですね。だから自然に「いつも喜んでおり、すべてのことに感謝する」ようになるのです。

聖霊によって生きる者となった時、自然と心に湧き上がる「キリスト讃歌」を、この項の決着として記しました。私たちキリスト者は、キリスト讃歌を歌いながら、みんな「新しい永遠のいのち」(第六章　　永遠のいのち)へと新生して行きます。

第四部　字句訂正

文中、安部首相を、ーー「阿部」と誤記致しました。お許しを願って訂正いたします。